

# 東アフリカ大湖地方におけるバナナの品種多様性に関する人類学的研究

## —Bioversity International でのインターンシップ活動— (2)

平成13年入学

派遣先国：ウガンダ

派遣先期間：Bioversity International, Uganda

佐藤靖明

キーワード：バナナ、東アフリカ大湖地方、ブガンダ、品種多様性、遺伝資源保全

### 派遣先機関の概要

Bioversity International (以下 BI) は、2006年12月に国際遺伝資源研究機関 (International Plant Genetic Research Institute, IPGRI) と国際バナナ・プランテン改良ネットワーク (International Network for Improvement of Banana and Plantain, INIBAP) が完全合併してできた新名称の研究機関である。世界各地に16のオフィスと320人のスタッフを擁し、総本部がイタリアのローマに、バナナ研究の本部がフランスのモンペリエにある。この機関の大きな目的は、遺伝資源の保全と住民の生活向上を両立させながら推進していくことである。ウガンダ支部は合併前に INIBAP の東部・南部アフリカ支部であったこともあり、従来どおり東部・南部アフリカのバナナに関わる研究を統括・調整する役割を果たしている。

### 派遣先の志望動機と、派遣前に設定した目標について

作物の遺伝資源保全において、現地の品種の多様性を支える文化・社会的なメカニズムと、多様化の植物学的機構を組み合わせることで考えることの重要性が高まっている。その際、社会科学と自然科学双方からの見解を考慮にいれながら、地域における品種多様性の位置づけをおこなうことが必要となってくる。

これまで報告者は、ウガンダ中部ブガンダ地域において、人びとの認識・行為や社会関係といった観点から、バナナの品種多様性の維持機構に関する調査研究をすすめてきた。しかし、植物学的な視点や、他地域の品種多様性についての情報が不足しており、調査結果の洗練された位置づけができずにいた。派遣先の組織はバナナの遺伝資源事情に精通した自然科学系研究者を中心に構成されており、国を越えた広い活動範囲を特徴とする。このため、インターンシップ活動をとおしてそれらに関する知見を手に入れることを目標とした。

### 派遣期間中の活動について

1 ルワンダ北東部およびカンパラにおけるワークショップ・講習会に参加し、アフリカや欧米のバナナ研究者との交流を深め、知見を深めた。



写真1 バナナが茂るルワンダ北西部の町ギセニ



写真2 住居と庭畑のバナナ（ルワンダ北西部）

2 セミナー"Interface of Anthropology and Biodiversity"を企画して実施した。BIと国際ポテトセンターの研究者が参加した。この研究会において、"Anthropological Approach to Landrace Diversity of Bananas"という題で発表をした。

3 タンザニアのダルエスサラームでおこなわれたThe Banana Research Network for Eastern and Southern AfricaのSteering Committee Meetingに出席した。東部・南部アフリカ各国のバナナ研究者約30人が集まり、各研究報告の後、組織の運営や新たなプロジェクトに関する討議がなされた。この中で、"Anthropological Approach to *in situ* Conservation of Banana Diversity"という題で発表をおこなった。



写真3・4 BARNESA Steering Committee Meeting（全体会議・グループディスカッション）

4 国際シンポジウム"Re-Contextualizing Self/Other Issues: Toward a HUMANICS in Africa"（マケレレ大学社会科学部・京都大学アフリカ地域研究資料センター・日本学術振興会主催、於ウガンダ・マケレレ大学）の企画・実施に参加し、当日は"Livelihood and Creativity: A Cultural Implication of Indigenous Banana Cultivation in Buganda"という題で発表をした。派遣先の研究員に聴衆として参加してもらうことで、京都大学の地域研究の特色を伝え、学術的な交流を深める良い機会となった。

5 共同研究プロジェクトのプロポーザルを派遣先とともに作成した。このプロポーザルは、東アフリカ大湖地方固有の品種群の生成・維持過程の解明、遺伝資源の現地保全計画を視野にいたったものである。

## 派遣先で印象に残った体験や経験

一つめは、国際的なバナナ研究ネットワークの広がりや濃密さを目の当たりにしたことである。アフリカや欧米の各国から研究者が絶え間なく事務所に訪れるとともに、BI主催のワークショップや会合が東アフリカ各国で毎週のようにおこなわれていた。このようなネットワークに接することを通じて、報告者の研究がどのような人たちにどのように受け入れられるのかについてのイメージを明確にすることができた。

二つめは、報告者が派遣先から学ぶとともに、報告者の研究から吸収できる知見を派遣先に考えてもらえたことである。報告者の研究は、日本の生態人類学をひとつのルーツとしており、欧米における民族生物学や農学とは別の学問的背景をもつ。そのためもあってか、報告者の現象のとらえ方や調査方法が、極めて新しいものとして受けとられた。違いを認識しつつ前向きに事業をすすめていこうとするBIの研究者らの柔軟さに、多くの学ぶべきところを感じた。

### **目標の達成度や反省点について**

BIにチームの一員として全面的に受け入れてもらえたことによって、さまざまな会合に参加し、多くの研究者に自身の研究を紹介して交流を深めることができた。植物学的な知見や、他地域の事例に関する情報を探索することを通じて、アフリカのバナナに関する研究において明らかにされていない領域を明確化することができた。今回は遺伝資源の現地保全プロジェクトを直接視察することができなかったので、今後の課題としたい。